

「英語プログラムの質と実践向上のためのハンドブック」 の出版にあたり



研究ノート

安元 佐織*

*A Handbook for Enhancing English-Medium Program Quality and Practice:
Towards Effective Teaching, Learning and Assessment*

Key Words : English program, effective teaching, effective learning,
effective assessment, handbook

1. 出版に至った経緯

大学教育の国際化の一環として、文部科学省は2009年に日本にある大学13校に英語で学位取得可能な「グローバル30」というプログラム設立事業を立ち上げた。大阪大学も13校中のひとつに選ばれ、学部レベルでは「化学・生物学複合メジャーコース」が2010年から、「人間科学コース」が2011年からスタートした。大学院レベルでも「国際物理特別コース」及び「統合理学特別コース」が2010年から開講された。

英語学位コースでは、多様な教育経験をもつ教員と様々な文化背景をもつ学生が学びを共有するため、教員間の教育哲学や、学生がこれまで慣れ親しんできた学習方法などが多種多様な傾向がある。大学教育の国際化について語られる際には「多様性」や「個別性」は肯定的に理解されることが多いが、ひとつの教育プログラムを立ち上げ継続していくには、「一貫性」ある教育目標や「統一」された学生の評価基準を規定するシステムが必須となる。

私たち「グローバル30人間科学コース」（現在は、人間科学部コース）の教員は、2009年のプログラム設立準備過程から試行錯誤を重ね、プログラムに所属する教員間で共有する教育の質を向上させるた

めの実践例を *A Handbook for Enhancing English-Medium Program Quality and Practice: Towards Effective Teaching, Learning and Assessment* にまとめた（著者・監修 Beverley A. Yamamoto and Don By-south）。この本は、教育アプローチに関する先行研究を参考に、多様化された教育現場での私たちの経験を織り交ぜたものとなっている。著書は英語で書かれており、内容も英語プログラムにおける実践例に焦点を当てている。しかし、実践例の多くは言語を超えて応用が可能なため、この研究ノートではそのような箇所に重点をおいて日本語要約として紹介する。

2. プログラムの質向上のためにできること

プログラムに所属する教員と学生が明確な学習目標を共有し、目標達成のために効率的な学習方法を用いることは、教育プログラムの質を向上させ保持するための必須事項といえる。そのために私たちが実践しているプログラム作成の4過程を以下で紹介する。

(1) Benchmarking (ベンチマーキング)

教育プログラムを成功させるにあたり最も重視すべきことは、「ベンチマーキング」と呼ばれる教育の基準や水準を設定するプロセスである。この「ベンチマーキング」は、2つのレベルで行うことができる。まず始めに、学生が卒業するまでに達成すべきことを、プログラム全体の目標として立て、また何を基準にその目標を達成したと評価するのかを明確にする。次に、そのプログラム全体の目標を達成するために各学年の学生が習得すべき知識レベルや学習内容基準を設定する。



* Saori YASUMOTO

ジョージア州立大学 社会学部 (2010年)
現在、大阪大学人間科学研究科国際交流室
講師 博士 社会学
TEL : 06-6879-4038
FAX : 06-6879-4038
E-mail : syasumoto@hus.osaka-u.ac.jp

(2) Learning Outcomes (ラーニングアウトカムズ)
「ベンチマーキング」でプログラム全体、学年別、講義別の学習目標基準を設定した後に行うのが、「ラーニングアウトカムズ」である。この段階で各教員は、講義ごとに受講生に習得して欲しい具体的な学習成果内容を決めることとなる。著書の中では、①知識と理解 ②スキルの二側面から学生の学習成果を評価するアプローチをとっている。

「ラーニングアウトカムズ」の知識と理解の側面では、学生がどのような知識をどの程度のレベルまで理解すべきかに焦点を当てた具体的な目標を設定する。もし講義がIとIIで成り立っている場合、学生は講義Iで学んだ知識を講義IIでさらに深めることが期待される。また、知識の深さや理解度を測定するために得た知識を実生活に応用できるかを確認するのも重要な点である。スキルの側面では、受講生の読解力、プレゼンテーション能力、レポートの書き方など学習における技術的な面に注目し、学生が学年を追うごとに高度なレベルで成果を出せるような目標を設定する。

(3) Syllabus (シラバス)

教員が一学期間を通して学生に習得して欲しい学習内容を設定し、それを学生と共有するために用いるのが「シラバス」である。教員にとってシラバスは、学生とコミュニケーションをとるための道具であり、また学生にとってシラバスは学習目標を達成するためのルールブックとして使われるのが効果的である。

シラバスで下記の事項についての詳細を明確に記すことで、教員と学生が学習目標と学習過程を共有することが可能になる。

- 授業について
教員名、Emailなどの連絡先、オフィスアワー、講義日程、教室などを記載する。
- 学習目標
「ベンチマーキング」と「ラーニングアウトカムズ」の過程で設定した学習目標を具体的に記載する。教員が学生に学んで欲しいと希望する項目をできるだけ具体化してリストにすること

によって、学生は与えられた課題がどの学習目標達成のために行っているのかを理解し自主的に課題に取り組むことができるようになる。

- 講義スケジュール
各週の講義内容がわかるような題目と学生が講義に来るまでにすべき課題を記載する。リーディングの宿題を課す場合、あらかじめシラバスに詳細(著書名、著者名、読むべき章、ページ数)を紹介することで、学生は学習内容を具体的に想像することが可能となる。
- 学習課題
一学期間をとおして学生に提示する課題の内容とスケジュールを記載する。例えば、試験やレポートの数や日程などをシラバスに記しておくことで、学生は自身の学習スケジュールを立てることが可能となる。また、学生が自主的に課題に取り組む意欲が持てるように、個々の課題がどの学習目標の達成のために行うものなのかを説明することも大切である。
- 評価方法
一学期間を通しての成績は、どのようにつけられるのかを明確に記載する。例えば、ひとつひとつの試験やレポートが最終成績で占める割合を明記することで、学生は自身の成績を把握できるようになる。レポートのように採点基準がわかりにくい課題に関しては、評価内容をシラバスの中で学生に伝えることで、課題で求められることが明白になり学生の学習意欲を高めることができる。

(4) Moderation (モデレーション)

綿密にベンチマーキングを行い、はっきりした学習目標をベースに学習計画をたて、それをシラバスによって受講生と共有することによって、学ぶ側も教える側も目的意識は向上する。しかし、どんなに慎重に準備を行っても、用意した課題では学習目標を効果的に達成できなかつたり、学習内容に偏りができてしまつたり、学生から提出されたレポートを公平に評価してあげられないことなどが起きてしまう。そのため、私たちは「モデレーション」ミーティン

グを設けている。

このミーティングでは、プログラムに関わる教員が集まって設定した学習基準、学習目標、学習課題、採点基準の確認を行う。学習計画が効果的でなかったり公平性が欠けている場合は調整を行う。下記がモデレーションの内容例である。

- 教員間でシラバスを読み比べて、講義内容が重複していないか、基礎知識なしに高度な知識を学生に学ばせるなど、矛盾した順番での知識習得を学生に求めているかなどを確認する。
- 学生が行うリーディングの内容やレポートなどの課題が、シラバスに記載されている学習成果内容と合致しているかどうかを確認する。不明瞭な点に関しては、批判し合うのではなく、建設的なディスカッションを通して改善する。
- 教員間のレポートの採点基準を一定化させるために、担当講義で学生から提出され採点を済ませたレポートを複数の教員に採点してもらい、採点結果を比較する。これによって厳しすぎたり優しすぎたりするレポートの評価が起きないように調整する。

3. 今後の課題について

上記は、「グローバル 30 人間科学コース」(現在は、人間科学部コース) 教員の著書 *A Handbook for Enhancing English-Medium Program Quality and Practice: Towards Effective Teaching, Learning and Assessment* の中から、言語を超えて応用が可能と思われる箇所を日本語要約したものである。近年、様々な理由によって大学教育の国際化が求められているが、教育理念や教育法は文化や言語の影響を受けて成り立つものであるため指導教員の個人差が生じやすい。統一された一連の流れがある学習アプローチを行うためには教育機関やプログラムの教育理念や教育法を明確にすることが重要と考えられる。またプログラムを進めながら常に見直ししていくことも必要であろう。学びの場である大学が今後さらに国際的発展をするために、様々な教育背景や経験を持つ教員や学生が交流し影響を与え合いながら最新の教育法を見つけられる環境づくりが求められる。

参考文献

Yamamoto, Beverley A. & Don Bysouth. 2015. *A Handbook for Enhancing English-Medium Program Quality and Practice: Towards Effective Teaching, Learning and Assessment*. Osaka University Press.

